

# ブラジル人児童の使役表現の 産出に関する実証的研究

田口 香奈恵

キーワード ブラジル人児童、日本人児童、使役表現、産出、筆記テスト

## 0. はじめに

外国人児童の日本語カリキュラムを考える上で、日常会話などで比較的早く自然習得していく文法項目となかなか身につけにくい文法項目を見定めていくことは、非常に重要である。これまでの外国人年少者の習得研究では、滞日期間の短い子どもが研究対象とされることが多く、使役表現に焦点を当てているものはほとんどない。しかし、小学校での教科書（例：雨風吹かせる、煙を吐かせる）等や学校生活での先生や子ども達の発話を見ても使役は小学校1年生から用いられており、その理解・産出は重要であると考えられる。本稿では、ブラジル人児童と日本人児童の使役表現の産出について調査を行い、いつ頃かどのような形の使役表現が産出されるのか調べる。

## 1. 研究の目的

滞日2年未満の外国人児童を対象にした研究（伊藤：1997、松本：2000）では、自然発話場面での使役表現は観察されていない。来日4年以上の子ども（小学校3年生）からは、「ふらさせて（『振らせて』の意）」という表現が観察されている（松本2000）。これは、子どもが相手の持っていたおもちゃを見て、依頼の表現として「～させて」を使用している場面である。使役表現の出現はこの1例のみで、他には使役の出現は観察されなかったと報告されている。このように、滞日期間が長くなっても自然発話場面では観察されにくいことがわかる。さらに松本（2000）は、日本人児童の発話を観察し、使役表現は日本人児童の会話でもあまり使われていないことを指摘している。日本人幼児を対象にした研究では、使役の習得の初期段階では「食べさせて」のように要求を表すテ形との結びつきが強いこと（Shirai他2000）や、使役は4歳児でも4割以下

の子どもしか正しく使うことができないこと (Morikawa & Ono1997)、子どもはどんな使役文でも産出できるのではなく「食べさせる」のような特定の表現のみにおいて産出が容易であること (国立国語研究所1977) などが明らかになっている。

また、田口 (2001) では、「提示された絵カードを見ながら絵の内容についての質問に口頭で答える」という統制条件下で、滞日 1～2 年のブラジル人児童 2 名を対象に約 1 年間の縦断的研究を行った結果、観察・産出されにくいはずの使役表現がいくつか産出され、次のような結果が得られた。

- ①「笑わせる」や「驚かせる」のような自動詞の感情的な動詞 (寺村 (1982) の分類では「一時的な気の働き」) を表す表現から習得されやすい。
- ②産出されやすかった表現 (走らせる、運ばせる、食べさせる、驚かせる、笑わせる) は、学校生活での遊びに出てくるような日常生活に密着した表現である。これらの表現は、ブラジル人児童と同様の調査を行った日本人児童 (ブラジル人児童と同じクラス) から産出されやすい表現であった。一緒に遊んでいる仲間が使っている表現から習得されやすいことが示唆された。

そこで本稿では、田口 (2001) の事例研究の結果を検証するために、次の 3 点を明らかにすることを目的とし、より多くのブラジル人児童を対象に使役表現の産出状況を調査する。

- 1) 使役表現の産出の難易度は滞日期間と関係があるか。先行研究ではどのように変化していったか、どんな表現が観察されやすいかなどについては言及されていない。本稿では、より滞日期間の長い子ども達についても横断的に明らかにしていく。
- 2) 産出されやすい表現・されにくい表現は、田口 (2001) の結果①と②を支持するか。
- 3) 日本人児童にもブラジル人児童と同じ調査を行い、その結果を比較し検討する。日本人児童も調査対象としたのは、ブラジル人児童らと同じ年齢の子ども達が同じ課題をどれくらい達成しうるか、それをブラジル人児童と比較するためである。

## 2. 調査方法

### 2. 1 調査対象児

本研究の調査対象児は、小学校 2 年生～小学校 6 年生のブラジル人児童 55 名 (2 年生 14 名、3 年生 5 名、4 年生 8 名、5 年生 13 名、6 年生 15 名) と、小学

校1年生～小学校3年生の日本人児童283名（1年生95名、2年生96名、3年生92名）で、どちらも岐阜県内の公立小学校に通っている子ども達である。

表1 ブラジル人児童の滞日期間別平均年齢・来日年齢

	2年未満	2～4年	4～6年	6年以上
人数	13人	15人	13人	14人
平均滞日期間	1.36年(0.49)	3.33年(0.52)	5.19年(0.59)	7.92年(0.93)
平均年齢	10.08才(1.38)	9.66才(1.67)	9.69才(1.65)	8.92才(1.54)
平均来日年齢	8.71才(1.43)	6.33才(1.94)	4.42才(1.66)	1.17才(1.20)
平均学年	4.85年生(1.16)	4.26年生(1.75)	4.15年生(1.46)	3.42年生(1.55)

（平均滞日期間、平均年齢、平均来日年齢、平均学年の括弧内は標準偏差）

ブラジル人児童を滞日期間2年ごとに4つのグループに分けた。滞日期間別に分けたのは、本稿の目的1）「使役表現の産出の難易度は滞日期間と関係があるか」を考察するためである。以下、本稿ではブラジル人児童は滞日期間別で分析を進める。表1はブラジル人児童の各グループの平均滞日期間と平均年齢、平均来日年齢、平均学年を示している。事後に行った児童に関するアンケート調査の結果によると、55名中5名（全員滞日6年以上のグループ）が家庭で日本語のみを使っている以外は、滞日期間に関係なく家庭では両親や兄弟姉妹との会話は主にポルトガル語である。したがって、少なくとも会話レベルでは母語であるポルトガル語を習得していると考えられる。家庭での日本語使用に関しては、多くが家族と日本語を話す場合もあるが「少し」と答えており、それも家族全員ではなく、例えば父とだけのように、決まった人と話す時だけ日本語を使っている。また、各小学校の取り出し授業<sup>1</sup>の担当教師の話によると、ブラジル人児童は全員平仮名が書けて読める子ども達である。取り出し授業で日本語指導を受けているが、特に使役形の作り方や意味など「使役」項目について授業中の学習はない、ということであった。

## 2. 2 調査材料

調査に使用した使役表現は9つの表現である。<sup>2</sup> 以下は、調査で使用した表現文である。使役の分類は寺村（1982）を参考にしている。

a 群【Wガ Xニ Yヲ +使役態（他動詞）】

- ・たろう君はよしこさん（に）かばん（を）もたせる
- ・お母さんは赤ちゃん（に）ごはん（を）たべさせる

b 群【Wガ Xヲ +使役態（自動詞）：一時的な気の働き（寺村：1982 294）】

- ・たろう君はよし君（を）びっくりさせる
- ・たろう君はよしこさん（を）わらわせる
- ・よしこさんはたろう君（を）なかせる

c 群【Wガ Xヲ +使役態（自動詞）】

- ・先生はみんな（を）ならばせる
- ・お母さんはあかちゃん（を）あるかせる
- ・お母さんはたろう君（を）買い物（に）いかせる

d 群【Wガ Xヲ +使役態（自動詞）：非意志性（寺村1982 292）】

- ・たろう君は大きな花をさかせる

上の分類のうち d 群の「非意志性」は田口（2001）にはなかった分類であるが、教科学習の教科書などで使われていることから新たに加えることにした。「非意志性」を表す使役表現として「咲かせる」を用いる。

本調査は田口（2003、2006）の受身表現の調査と同時に行われた。その調査で扱った受身表現は10である。さらにダミーとして能動態で答える問題を4問加えた。子ども達は本調査の使役表現と合わせて23の問題に一度に取り組むことになる。使役表現の数を9つにしたのは、この調査対象者が小学1年生からであり、年少の子ども達が調査に集中して取り組める限界が9問だと判断したためである。そのため調査に用いた使役表現が制限された。

### 2.3 手続き

まず、子どもは提示された絵を見る。そして、その絵に合うように文を完成させる。動作主を表す助詞を「を」「が」「に」の中から1つ選ぶ。文末には、語幹が提示してあるのでその続きを書くことになる。文末動詞の語頭を示したのは、子どもが産出する動詞を統一させるためと、子どもが絵を表すための単語を忘れた場合などのヒントになると考えたためである。例の絵の場合だと、「よしこさんはたろうくん（を）なかせる」が正解となる。他の表現も同じように問題が設定してある。ただし、a 群と c 群「行かせる」の表現では助詞の選択箇所は2カ所、d 群の「咲かせる」では助詞の選択はない。

上記の「調査材料」で挙げた9表現に括弧と下線が記してあるが、括弧（ ）は助詞の選択部分、下線部は文末の完成部分にあたる。問題の提出順序は、上記の分類とは関係なくランダムであるが、どの子どもに対しても同じ順序で提示している。

例 よしこさんは たろうくん  $\left( \begin{array}{c} \text{を} \\ \text{が} \\ \text{に} \end{array} \right)$  な \_\_\_\_\_。



筆記テスト用紙の最初には設問を日本語とポルトガル語で併記し、具体例を示した。取り出し授業へやって来た子どもに、随時テスト用紙を与え、各自で取り組んでもらった。用紙を配布した後、やり方を口頭で日本語を使って説明した。制限時間は与えず、最後まで回答できた子どもからテスト用紙を回収した。日本人児童については、取り出し学級担当の先生を通して、各学級担任に空いている時間を使ってやってもらうようお願いした。日本人児童用のテスト用紙には日本語のみが書かれている。

### 3. 結果

ここでは、まずどんなタイプの反応があったかをまとめる。次に、正しく使役文を産出した数からブラジル人、日本人児童それぞれの結果を示し、両児童の結果を比較する。

#### 3. 1 産出反応

調査の結果、以下のようなタイプの反応がブラジル人児童、日本人児童から産出された。なお、ブラジル人の子ども達が本調査で使われた語彙を知っているかどうかという問題は、調査結果に大きな影響は与えないと考える。それは、ほとんどの設問において、提示されている動詞の語幹を使って何らかの産出が得られているからである。

(1) **正答**：助詞の選択、文末の動詞の使役形活用がともに正しい場合のことを指す。<sup>3</sup>

(2) **別の表現**：これは、文法的に正しいが、使役形以外で回答しているものである。文法的に正しい反応だが、本調査の「正答」である「使役表現の文を作る」という点に反するので「正答」から外して分類した。ブラジル人児童、日本人児童から観察された主なものを表2にまとめた。

「笑わせる」の産出反応を見ると、受身形での回答率はブラジル人児童、日本人児童ともに際立って高い。このことから、提示した絵は本調査の目的から見て妥当ではなかったと考えられる。従って「笑わせる」は分析の対象から除外することとする。よって、次節以降は8つの使役表現を分析の対象とする。

表2 産出反応：別の表現（％）

	ブラジル人児童 (55人)	日本人児童 (283人)
並ばせる：(ニ) 並んでと言う【引用】	5.4	7.7
持たせる：(ニ・ヲ) 持ってもらう【授受表現】	9.0	16.9
笑わせる：(ニ) 笑われる【受身形】	14.5	32.1

(3)助詞の間違い：この反応では、ブラジル人・日本人ともに、正答のヲ格を選ぶ代わりにニ格を選択する傾向が強い。

例：「(ヲ) 泣かせる」→「(＊ニ) 泣かせる」

(4)能動態：動詞を要求される使役態にせず、能動態で答える。この反応はブラジル人児童からの反応の中で最も目立ったものである。表3は各グループの能動態の反応の平均を表している。ブラジル人児童は滞り期間が長くなるにつれて能動態での反応は少なくなっている。日本人児童の場合も、学年が上がるにつれて同様の結果になっている。

表3 産出反応：能動態の全体平均（個）

ブラジル人児童（滞り期間別）				日本人児童（学年別）		
0～2年	2～4年	4～6年	6年以上	1年生	2年生	3年生
6.3	4.0	2.2	1.1	5.2	2.5	1.7

(5)活用の間違い：使役形に活用する際に誤る。

例：「(ヲ) 笑わせる」→「(ヲ) ＊わらかせた」

「(ヲ) 歩かせる」→「(ヲ) ＊あるきさしている」

(6)受身形・使役受身形：使役形にしなければならない表現を受身形や使役受身形で答える。この反応は、ブラジル人児童ではb群の＜一時的な気の働き＞に分類される3つの表現において産出された。日本人児童ではどの表現からも産出されている。

例：「(ヲ) 笑わせる」→「(ヲ) ＊わらわれる」

「(ヲ) びっくりさせる」→「(＊ニ) ＊びっくりさせられる」

(7)命令表現：文末を命令を表す表現にする誤用で、「～てください」で終わる。

例：「(ヲ) 並ばせる」→「(ニ) ＊ならんでください」

### 3. 2 使役文の産出

前節で見てきたように、本調査ではさまざまなタイプの反応が産出された。ここではその中の「正答」についてまとめる。「正答」とは「助詞の選択、文末の動詞の使役形活用がともに正しい場合」であり、この場合に限り「使役文の産出ができた」と見なす。なお、問題文の提示順序を統一したことによる影響はなかったと考える。これは、後半の問題の使役文産出率が前半に比べ特に高いということはなかったからである。

#### 3. 2. 1 ブラジル人児童

表4は、ブラジル人児童の滞日期间別使役文産出率を表している。これは、滞日期间ごとに、『使役文の産出ができた』人数÷各滞日期间別の子どもの数」で計算したものである。ブラジル人児童全体での使役文を産出した人数の高い順に並べてある。「食べさせる」は、滞日6年以上のグループの産出率が100%、全体の産出率も半分以上だったが、それ以外の表現では全体的に産出率が低い。滞日期間が長くなっても使役表現は出にくいことがわかる。

8表現合計の産出率を一元配置分散分析した結果、滞日期间別グループ間に有意な差があった( $F(3, 51) = 2.78, p < .05$ )。最小有意差検定による多重比較の結果、滞日2年未満と滞日2～4年グループ、滞日2～4年グループと滞日6年以上のグループそれぞれの平均値の間に有意な差が認められたが、他のグループ間の有意差は認められなかった。ここから、使役文産出の難易に差をつけている要因の一つに滞日期間にあることが示唆される。

表4 ブラジル人児童の滞日期间別使役文産出率(%) ( )内は人数

表現	分類	2年未満 <13名>	2～4年 <15名>	4～6年 <13名>	6年以上 <14名>	全体の 産出率
食べさせる	a群	7.6(1)	46.6(7)	46.1(6)	100.0(14)	50.9
泣かせる	b群	15.3(2)	40.0(6)	53.8(7)	42.8(6)	38.1
びっくりさせる	b群	0	33.3(5)	30.7(4)	50.0(7)	29.0
並ばせる	c群	0	6.6(1)	53.8(7)	50.0(7)	27.2
持たせる	a群	0	20.0(3)	38.4(5)	50.0(7)	27.2
咲かせる	d群	0	33.3(5)	46.1(6)	28.5(4)	27.2
歩かせる	c群	0	20.0(3)	23.0(3)	42.8(6)	21.8
行かせる	c群	0	0	15.3(2)	35.7(5)	12.7
一人当たりが産出した 表現数の平均(個)		0.2	2.0	3.0	4.0	

### 3. 2. 2 日本人児童

表5は日本人児童の使役文産出率を学年別に表したものである。日本人児童全体での使役文を産出した人数の高い順に並べてある。ほとんどの表現で、学年が上がるにつれて産出率も高くなっている。2、3年生において、ほとんどの表現から70%以上の産出率が得られているが、1年生では産出率が70%の表現は「食べさせる」、「咲かせる」の2例だけだった。

8表現合計の産出率を一元配置分散分析した結果、学年別グループ間に有意傾向があった（ $F(2, 280) = 3.02, p < .10$ ）。最小有意差検定による多重比較の結果、1年生と2年生グループの平均値の間に有意な差が認められた。

表5 日本人児童の学年別使役文産出率（%）

表現	分類	1年生 <95名>	2年生 <96名>	3年生 <92名>	全体の 産出率
食べさせる	a群	74.7	90.6	98.9	87.9
咲かせる	d群	80.0	89.5	93.4	87.6
泣かせる	b群	65.2	80.2	84.7	76.6
びっくりさせる	b群	42.1	75.0	69.5	62.1
持たせる	a群	40.0	68.7	72.8	60.4
並ばせる	c群	34.7	68.7	66.3	56.5
歩かせる	c群	47.3	63.5	54.3	55.1
行かせる	c群	23.1	42.7	47.8	37.8
一人当たりが産出した 表現数の平均（個）		4.0	5.7	5.8	

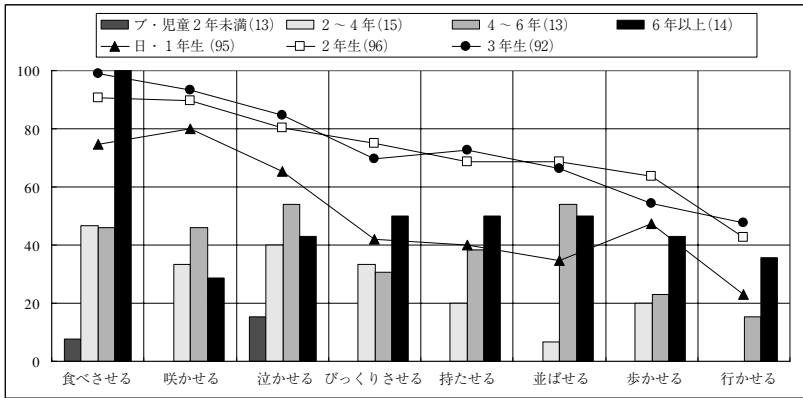
### 3. 2. 3 ブラジル人児童と日本人児童の比較

次に、ブラジル人児童と日本人児童を比較する。図1はブラジル人児童（滞日期間別）と日本人児童（学年別）の使役文産出率を表したものである。左から日本人児童全体平均の産出率が高い表現順に並べてある。

図1から、両児童にとって「食べさせる」は産出しやすく、「歩かせる」「行かせる」は産出しにくいことがわかる。産出されやすい表現とそうでない表現がはっきりと分かれた。一方で、「咲かせる」はブラジル人児童と日本人児童の結果に大きく差が出た。「咲かせる」は日本人児童からは産出されやすかったが、ブラジル人児童からは産出されにくかった。ブラジル人児童からは「さいます」や「さきました」などの能動態での回答や回答欄に何も書かない反応が多かった。



図1 ブラジル人児童（滞日期間別）と日本人児童（学年別）の産出率（％）



#### 4. 考察 —研究目的の検証—

「3. 2. 1」の滞日期間別使役文産出率を示した表4から明らかなように、4年以上の滞日グループで産出率が50%以上ある表現は、a群の「他動詞の使役態」に分類されるものとb群の「一時的な気の働き」に分類されるものである。それに対してc群の「歩かせる」、「行かせる」やd群の「咲かせる」は産出率が低い。特に「咲かせる」は日本人児童の結果と大きな差が出た。

産出率が高かった表現を寺村(1982)の分類で順序を示すことはできない。あえて指摘できる点は、「食べさせる」のような他動詞の使役態、「泣かせる」のような自動詞の感情的な動詞「一時的な気の働き」を表す表現が他と比べると産出されやすいということである。これは田口(2001)の結果を大枠で支持している。

使役表現は、東京外国語大学留学生日本語教育センター(1998)が作成した外国人年少者用小学校高学年のカリキュラム・ガイドラインにも含まれている項目である。このガイドラインは、教科学習をするための基本的な文法項目と語彙を効率よく学ぶことを目的に作られたもので、文法構造シラバスになっている。そこに載っている使役表現の例は、「先生は生徒に宿題をやらせました」と「先生は生徒の遊びをやめさせました」である。これらの表現は、学校生活と関係があり、先生から生徒(子ども)に対して命令や指導をする内容を表している。これらは、使役の学習を効率よく学ぶ時、最初に学習したほうがいい表現、使役を表すのにわかりやすい表現であると考えて選んだと考えられる。

しかし、本調査では、上記のような命令的、指導的な表現よりも、動作主が他の誰かから無理矢理に強いコントロールを受けてその動作を行っているものではない表現（食べさせる、泣かせる、びっくりさせる）のほうが産出されやすい結果になっている。松本（2000）の調査で、来日4年以上の子ども（小学校3年生）が依頼表現として「ふらせて（振らせて）」を使っている。さらに、Shirai他（2000）の子どもを対象にした調査によると、使役態が現れる初期の段階では、「食べさせて」のような使役態とテ形は強い結びつきが見られ、観察された使役のほとんどが意味的に「放任的／補助的（Shirai他2000）」なものであったと報告されている。これは「子どもが何かを要求したとき、他の誰かによって自分自身の行為をコントロールしてほしいのではなく、他の誰かの許しや援助がほしい」ために使われる表現であると考察している。

一方で、「並ばせる」や「持たせる」、「歩かせる」、「行かせる」は、前述のガイドラインの例にある表現と同様のものである。これらの産出反応には命令をするタイプのものが見られる。特に先生が怖い顔をして子どもを並ばせている絵「並ばせる」からは、「並んでください」や「並びなさい」、「並んでと言っている」といった例が12例（ブラジル人児童全体の20%）産出されている。つまり、命令や指導を受けるような場面では、使役を用いて表現するのではなく、「てください」などの命令を表す表現を用いる傾向があると言える。以上の点から、産出されやすい傾向にある表現は、「～させて」と依頼を表すものや、命令的指導的なものではない使役表現であることが示唆される。

上記の説明の中でまだ触れていない表現に「咲かせる」がある。これは日本人児童と比較して顕著な違いがあったものである。日本人児童の産出率は「食べさせる」に次いで高かったが、ブラジル人児童からはどの滞日別グループからも産出率は50%に届かなかった。回答欄に何も書いていないブラジル人児童は全体の36%である。他の産出反応を見ると、「能動態」、あるいは意味の全く通らないものが目立つ。どのように表現したらよいのか全くわからなかった表現であったとも考えられる。ポルトガル語話者（成人）に同じ絵を見せてポルトガル語で表現してもらったところ、『咲かせる』をポルトガル語の使役形で表現することはできても、日常で使われるような自然なものではなく不自然である。もし日本語の『咲かせる』と同じ状況を表す場合は、『たろうくんが花に水をやって、花が大きくなった』のように言うのが自然である」ということだった。さらにこの表現は、教科学習の教科書などに登場する可能性の高い表現でもある。日本人児童で産出が高くなったのは、教科学習の中で低学年から親しんでいるからだと考えられる。ブラジル人児童にとって「咲かせる」は、教科学習で登場するような抽象的概念で、日常生活とはかけ離れた、直接自分が援

助や命令を受ける表現ではないと言える。

以上の産出順序は、田口（2001）の「日常生活に密着した表現は産出されやすい（田口：2001）」という結果を支持している。さらに、これらの表現は子ども自身に「じかに降りかかる経験（田口：2001 129）」、つまり、行為そのものを受ける表現であるという点と一致している。

## 5. まとめと今後の課題

本稿では、ブラジル人児童の使役表現文の産出について、田口（2001）で得られた結果を検証するために、日本人児童との比較を通し、考察を行った。これらをまとめると、次のようになる。

- (1) 滞日期间 2 年未満の子どもからは筆記において使役表現は産出されにくいことが明らかになった。滞日期间が長くなるとともに、要求される回答通りに答えることができる表現が増えてはいるが、滞日 2 年以降でも産出の伸びが小さく、6 年以上日本にいても出にくい表現があった。
- (2) 「食べさせる」のような他動詞の使役態、「泣かせる」のような自動詞の感情的な動詞「一時的な気の働き」を表す表現が他と比べると産出されやすい。
- (3) 本調査対象のブラジル人児童は、半数以上が小学 4 年生以上の高学年であるが、それにもかかわらず低学年（小学 1～3 年生）の日本人児童の産出率のほうが高い。ブラジル人児童よりも日本人の子ども達の産出率は高く、ブラジル人児童らは日本人児童のレベルまで追いついていない。特に、教科学習などで用いられるような「非意志性」に分類される表現において、ブラジル人児童が日本人児童のレベルに達していないことがわかった。

以上、ブラジル人児童の使役表現の産出について課題文完成筆記テストを用いて調査し、その結果を考察してきた。使役表現は回避行動が多く日常生活からではなかなか観察されにくいものであるが、「文完成筆記テスト」を通して出現しやすい表現とそうでない表現があることが明らかになった。これらの結果は、田口（2001）の結果を支持するものとなった。また、田口（2001）にはなかった「非意志性」に分類される使役表現は、教科書などで使われているにもかかわらずブラジル人児童にとって馴染みのある表現ではなく、産出されにくいことが明らかになった。

今後は、来日年齢やポルトガル語との関係、使役文が使えるようになるかどうかのようなことが表現できるようになるのかについて追究していきたい。

**謝辞** 本調査に際し、ご協力いただいた岐阜県内の公立小学校（大垣市、可児市、中津川市）の先生方、児童の皆様にご心より感謝の意を表したい。

## 注

- 1 日本語指導が必要な児童を在籍学級での正規の授業から取り出して、別の教室で日本語などの学習をさせる形態。
- 2 以下の3点を考慮して本研究の調査文を作成した。①子ども達の学校生活に関連があると思われるもの（産出が容易ではないと予想される表現を含む）。②工藤（1996）の『児童生徒に対する日本語教育のための基礎語彙調査』の中から、出現頻度の高かった（子ども向けの6つの教科書中3種類の教科書に共通して出現）動詞を用いた。③使役文を絵に表した時、不自然でないもの。つまり、文と絵が一致し、使役表現での産出による可能性が考えられるもの。
- 3 「歩かせる」から「お母さんはあかちゃん（二）あるく練習をさせている」という産出があった（日本人児童から5例）。この反応も、助詞の選択、文末の動詞の使役形の活用が正しいので正答とした。

## 引用文献

- 伊藤早苗（1997）「年少者日本語学習者の構文習得—縦断的事例研究—」『北海道大学留学生センター紀要』 1：68-82
- 工藤真由美（1996）『児童生徒に対する日本語教育のための基礎語彙調査』 ひつじ書房
- 国立国語研究所（1977）『幼児の文法能力』東京書籍
- 田口香奈恵（2001）「ブラジル人児童の受身・使役表現の習得に関する事例研究—日本人児童・幼児との比較を通して—」『第二言語としての日本語の習得研究』 4：116-133 第二言語習得研究会
- 田口香奈恵（2003）「ブラジル人児童の受身表現の習得に関する実証的研究—産出反応の分析に基づく考察—」『言葉と文化』 4：115-128 名古屋大学大学院国際言語文化研究科日本語文化専攻
- 田口香奈恵（2006）「ブラジル人児童の受身表現の習得に関する実証的研究—先行研究の検証—」『言葉と文化』 7：165-178 名古屋大学大学

院国際言語文化研究科日本言語文化専攻

寺村秀夫 (1982) 『日本語のシンタクスと意味第1巻』 くろしお出版

東京外国語大学留学生日本語教育センター編集 (1998) 『外国人児童生徒のための日本語指導1—カリキュラム・ガイドラインと評価—』 ぎょうせい

松本恭子 (2000) 「[縦断調査研究] ある中国人児童の来日2年間の動詞形態素使用実態—縦断調査結果と日本人児童、及びロシア人児童との比較—」 『南山日本語教育』 7: 115-127 南山大学大学院外国語研究科

Morikawa, H. & Ono, S. (1997) "Children's understanding of causatives in Japanese: A cross-sectional study" *SRCD*

Shirai, Y., Miyata, S., Naka, N., & Sakazaki, Y. (2000). The acquisition of causative morphology: Why does it correlate with the imperative? In E. V. Clark (Ed.), *Thirtieth Child Language Research Forum Proceedings* (pp. 87-94). Stanford, CA: CSLI [Distributed by Cambridge University Press]

